

平成 29 年 6 月 13 日現在

機関番号：12102

研究種目：新学術領域研究(研究領域提案型)

研究期間：2012～2016

課題番号：24101001

研究課題名(和文)西アジア文明学の構築

研究課題名(英文)Facilitating the Study of West Asian Civilization

研究代表者

常木 晃(TSUNEKI, Akira)

筑波大学・人文社会系・教授

研究者番号：70192648

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 24,100,000円

研究成果の概要(和文)：現代世界の根幹部分を正しく理解し相互理解を進めていくために、古代西アジア文明の特筆すべき先進性と普遍性の根源を抽出し総合することで、なぜ、そしてどのように西アジア文明が現代世界の基層となり得たのかについての解明を目指しました。各計画研究、公募研究の研究成果を総合し、古代西アジアが文明を準備するための奇跡ともいえる自然環境(地理、地形、地質、動植物)を有していたこと、それらの自然環境を多様でダイナミックな人間集団が様々に開発することで古代西アジア文明が築き上げられたことを描きました。

研究成果の概要(英文)：For understanding the roots of the modern world and accelerating mutual understanding between West Asia and the west, we looked for the universality and innovative spirit contained within Ancient West Asian Civilization. We looked for why Ancient West Asian Civilization could facilitate the foundation of all modern civilization. Based on the planned and open call studies, we concluded that there were favorable natural environments (geography, topography, geological features, animals and plants) at the time of ancient West Asian Civilizations and the various, dynamic human groups developed these natural and cultural resources in various ways.

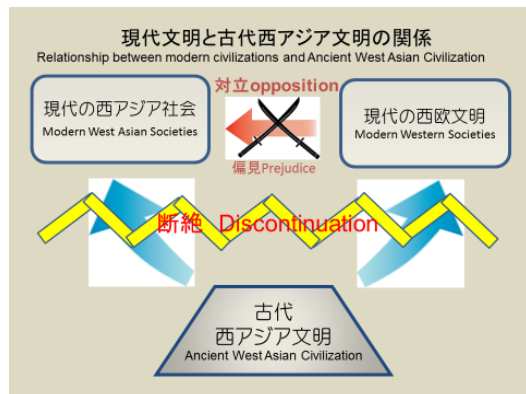
研究分野：考古学(先史学)

キーワード：西アジア文明学 古代西アジア文明 現代文明の基層 文明の衝突 人類史の転換点

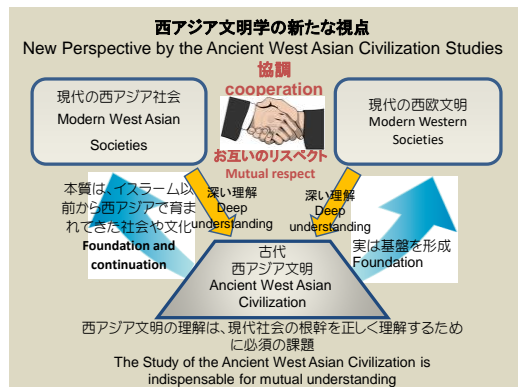
1. 研究開始当初の背景

現代において、西欧社会によるイスラームに対する偏見や文明の衝突などと言う言質の中で、西アジアの諸社会を西洋への対立軸として捉え、非西洋的な象徴としてスケープゴートとしてきた傾向があることは排除できません。現代政治に極めて大きな影響を与えてきたサミュエル・ハンティントンの『文明の衝突 The Clash of Civilizations』(1996)では、ソ連邦崩壊後の世界の紛争が国家間の抗争から文明間の衝突へと変化し、世界は行き詰ると分析しています。人々は人為的な国境や国旗に従うよりも、自己のアイデンティティに基づいた自身の属する文化や文明に結集するということです。その最も激しい対立軸が、西欧対イスラームでした。

しかし、文化や文明を視座とした時に、両者は果たして本当に対立的なのでしょうか。イスラーム以前の古代西アジア文明を深く研究すれば、この文明が達成したムギ作農耕や都市社会、キリスト教などが西欧社会の基盤を形成している事実突き当たることになります。つまり西アジア文明の研究は、現代イスラーム社会の理解のみならず、現代世界の根幹部分を正しく理解し相互理解を深化させていくためにも、極めて重要かつ必須のアイテムだと考えました。



現代において主流の文明観



本新学術研究で目指した新たな文明観

2. 研究の目的

総括班の研究目的は、新学術研究領域「現代文明の基層としての古代西アジア文明」に参加する各計画研究班や公募研究班をまとめ、現代世界の根幹部分を正しく理解し相互理解を進めていくための新しい学問として西アジア文明学を構築することにあります。私たちの目指す西アジア文明学は、単なる思索の学問ではなく、人類史的テーマを持った西アジア各地での考古学をはじめとする個々のフィールド調査や出土粘土板文書などを読み解いていく文献研究、それに連動する環境科学、分析化学、保存化学などの実証的研究を積み上げていくことで具現化できるものです。現代文明にまで繋がる古代西アジア文明の先進性と普遍性を研究する学問としての西アジア文明学の構築は、我が国においてはこれまで全く行われてこなかった新しい研究上の試みと言えます。

3. 研究の方法

本新学術領域研究では、古代西アジア地域にかかわる多様な人材を組織し、文理さまざまな分野の複数の計画研究を同時進行させ、古代西アジア文明に関わる多様な研究に取り組みました。計画研究、公募研究では、現生人類の出アフリカ問題のルート追究から始め(計画研究 1,4)、農耕牧畜技術の発明・展開(計画研究 2,5)、冶金など工芸技術への新たな視点(計画研究 3)、都市と文字の開始と発展(計画研究 6,8)、セム系言語の発達問題(計画研究 7)、一神教の始まり(公募研究)、古代とイスラームとの関わり(公募研究)など、古代西アジアの最も重要な人類史的テーマに対し、フィールドを重視しながらそれぞれ新たな視点から研究を実施しました。またこれらの研究と、年代測定、アイソトープ、地質構造、石材の微細構造、タンパク質の構造分析といった自然科学分野から参加した多様な研究(計画研究 4,9~11、公募研究)が協同して、古代西アジアの人間社会の歴史と自然環境との関連を様々に体系づけることに成功しました。また、研究成果をフィールドである西アジア諸国に還元していく一環として、文化財の科学分析と保存を担う研究(計画研究 12)も設け、実際のフィールドで文化財の分析・保存を手掛けています。

総括班は、計画研究、公募研究を支援し、それらの研究成果を統合して西アジア文明学というべき新たな研究領域の構築を目指してきました。人類の基層文化としての西アジア文明学の構築です。古代の西アジア地域は、人類史の大転換の舞台であり続けました。特に紀元前1万年前から紀元前1千年紀までの約1万年間は、世界のフォアランナーとして世界史を牽引し、そのような歴史プロセスが、現代のあらゆる社会へと繋がる基層文化を創りあげました。計画研究、公募研究では、基層文化としての西アジア文明に目を向け、

西アジア各地でのフィールドワークを通じて資料を収集、研究を積み上げてきました。総括班では、古代西アジア文明の特筆すべき先進性と普遍性の根源を抽出し総合することで、なぜ、そしてどのように西アジア文明が現代世界の基層となり得たのかについての解明を目指しました。

4. 研究成果

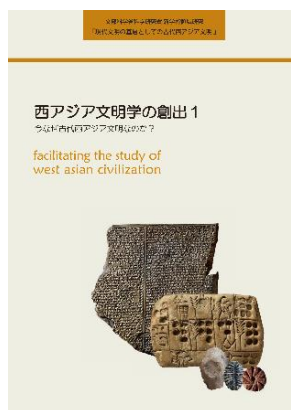
これらの研究結果を総合した結果、西アジア地域が文明を準備するための奇跡ともいえる自然環境（地理、地形、地質、動植物）を有していたこと、それらの自然環境を多様でダイナミックな人間集団が様々に開発することで古代西アジア文明が築き上げられたことを描くことができました。領域全体としてのこれまでの研究成果は、特に以下の4報告に集約されています。

- ① 『西アジア文明学の創出1：今なぜ西アジア文明なのか?』 *Facilitating the Study of West Asian Civilization: What Does*

Ancient West Asia Tell Us?

筑波大学西アジア文明研究センター編

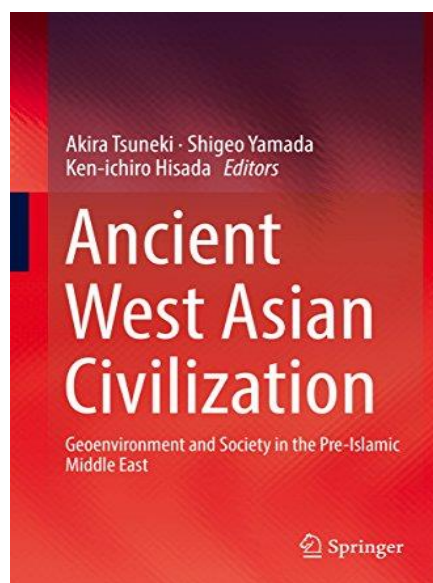
Research Center for West Asian Civilization (ed.), 2014年6月



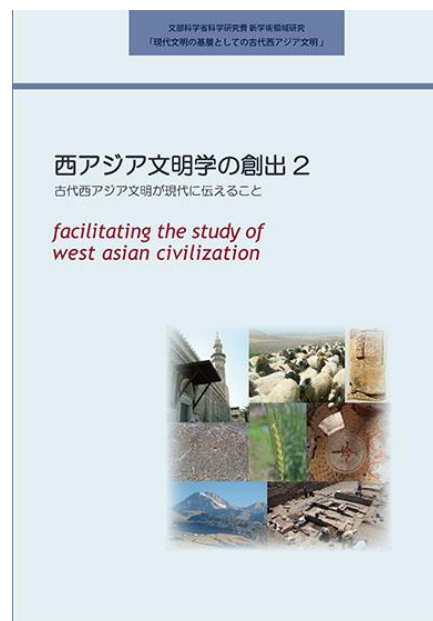
- ② 『西アジア文明学への招待』 筑波大学西アジア文明研究センター編、悠書館、東京、2014年12月



- ③ *Ancient West Asian Civilization: Geoenvironment and Society in the Pre-Islamic Middle East*, Tsuneki, A., Yamada, Sh. and Hisada, K. (eds.), Springer, New York. 2016年9月



- ④ 『西アジア文明学の創出2：古代西アジア文明が現代に伝えること』 *Facilitating the Study of West Asian Civilization: Ancient West Asian Civilization and the Modern World*. 筑波大学西アジア文明研究センター編 Research Center for West Asian Civilization (ed.), 2017年3月



各計画研究班や公募研究は様々な成果を挙げており、それらの成果の概要については、各班の成果報告書に詳しく書かれています。多くの場合、複数の計画研究班や公募研究班が連携して研究に当たり、考古学と自然科学、

文献学と言語学、考古学と歴史学、歴史学とイスラーム学などが共同で、さらに多くの研究分野が複合的に融合して研究が実施されたことは、本新学術領域研究の視座と成果をより豊かにできたものと自負しております。このような連携研究による主要な成果をいくつか挙げておきます。

- ① イラン、トルコ、イラク・クルディスタンで考古学調査と環境科学調査、文献学調査を連携して行い、現生人類の拡散、農耕や都市文明の始まり、パイロテクノロジーの出現とその後の展開の諸相について多くの成果を得、主に英文で報告してきました（全計画研究と公募研究の一部が様々な連携）。
- ② 古代西アジアの前2千年紀の識字文化の諸相、特に書記教育のカリキュラム、暦と祭礼についての楔形文字学の国際共同研究を実施し、最新の成果を複数の英文モノグラフとして公刊しています（計画研究6-8班が連携）。
- ③ トルコのウズムル教会壁画の修復技術研究やシリアの文化遺産保護のための事業にユネスコや文化庁と協力して取り組むとともに、シリアの考古学的遺産の重要性を総括的に示すモノグラフを英語とアラビア語で出版しています（総括班、計画研究6、12が連携）。
- ④ 古代西アジアに生まれた文明の諸相とその発生のメカニズムを地球科学的・考古学的・歴史学的・社会学的見地から説明するため、シンポジウムを開催し、一般に向けて、人類の基層文化としての西アジア文明の重要性を示し、その成果として英文のモノグラフを出版しています（全計画研究班と公募研究班が連携）。
- ⑤ 古代との断絶が強調されてきたイスラーム成立期とそれ以降の西アジア社会の中に認められる様々な古代西アジア的伝統を整理し、それらが古代西アジア文明に統合されるものであることを論証しました（計画研究8および公募研究が連携）。
- ⑥ 西アジアの古代小麦を利用した、日本でも育成可能な早生種のデュラム小麦の生成に成功しました（計画研究班2・3・5が連携）。

本新学術領域研究では常に古代西アジア文明と現代社会との関わりについて問い問われてきました。そのような意味では、上記した主な研究成果のうち、3)~6)に関しては、古代西アジア文明と現代社会との関わりそのものを扱った研究成果と言えましょう。例えば、3)で実施しているトルコ・ウズムル教会壁画の修復技術研究では、トルコ人若手研究者の文化財修復技術の向上が図られ、現地での文化財保全に役立っているばかりでなく、プロジェクトを通じて現地カッパドキアの人々に文化遺産の持つ現代的な意味を再考してもら

う大きなきっかけとなっています。またシリア文化遺産の重要性を示したアラビア語本の出版では、同書をシリアでの学校教育や周辺国での難民学校での教育に使用する動きが広がっており、シリア人の若者が自国に対する誇りやアイデンティティを取り戻すきっかけとなったといううれしいニュースも届けられています。また6)の早生種デュラム小麦生成の成功は、日本産パスタの開発に直接つながるもので、古代西アジア文明の研究が現代の私たちの生活に直接役立つことを証明しています。こうした研究成果は、まさに本新学術領域研究の様々な研究成果が現代社会の問題解決に直接的に貢献できた事例と言えることができるでしょう。前述したように、本新学術領域研究は、現代社会における西アジア社会への偏見や対立を、古代西アジア文明を視座として、連携と協調へという図式に変換したいと強く願って遂行されてきましたが、こうした実践を通じて少しでもその目的に貢献できたのではないかと考えています。

本新学術領域研究を通じて、筑波大学に人文社会国際比較研究機構（ICR）西アジア文明研究センターという、わが国で初めて古代西アジア文明を総合的に研究する拠点が形成されたことも、将来の西アジア文明学の発展を考える上で大変重要なことであったと考えています。研究拠点形成という新学術領域研究の目的の一端は果たせたと考えています。同センターを通じて、西アジア文明学という日本ではまだ謳われたことのない新たな学術領域が芽生えたのは、本新学術領域研究の一つの成果と言えるでしょう。

しかし、西アジア文明学の創成はまだ途に就いたばかりです。多様で豊かな研究者群を結集させ、現代社会の基層を形成した古代西アジア文明の先進性と普遍性について新たな発想で研究を継続していくためには、私たちのこれからの努力が極めて重要になってくることを肝に銘じて、本新学術領域研究総括班の成果報告をさせていただきます。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計25件）

- ① Tsuneki, A. The burial of Neolithic blade producer, *Al-Rāfidān* 38: 39-45. The Institute for Cultural Studies of Ancient Iraq, Kokushikan University, Tokyo, 2017（査読有）
- ② 常木 晃 「西アジア文明学の構築」『西アジアにおける現生人類の拡散ルート—新仮説の検証—成果報告』『現代文明の基層としての古代西アジア文明 Newsletter』 vol.9:1-4, 5-8, 2017（査読無）
- ③ Tsuneki, A., K. Rasheed, S. A. Saber, S. Nishiyama, N. Watanabe, Tina

- Greenfield, B. B. Ismail, Y. Tatsumi, and M. Minami “Excavations at Qalat Said Ahmadan, Qaladizah, Iraq-Kurdistan: Second interim report (2015 season)”, *Al-Rāfidān* 37: 89-142. The Institute for Cultural Studies of Ancient Iraq, Kokushikan University, Tokyo, 2016 (査読有)
- ④ Tsuneki, A., K. Rasheed, S. A. Saber, S. Nishiyama, R. Anma, B. B. Ismail, A. Hasegawa, Y. Tatsumi, Y. Miyauchi, S. Jammo, M. Makino and Y. Kudo, “Excavations at Qalat Said Ahmadan, Slemani, Iraq-Kurdistan: First interim report (2014 season)”, *Al-Rāfidān* 36: 1-50. The Institute for Cultural Studies of Ancient Iraq, Kokushikan University, Tokyo, 2015, (査読有)
- ⑤ Yamada, S. (2014) Inscriptions of Tiglath-pileser III: Chronographic-Literary Styles and the King’s Portrait, *Orient* 49: 31-50. (査読有)
- ⑥ Masuda, S., Goto, T., Iwasaki, T., Kamuro, H., Furusato, S., Ikeda, J., Tagaya, A., Minami, M., and Tsuneki, A. (2013) Tappeh Sang-e Chakhmaq: investigations of a Neolithic site in northeastern Iran, in Matthews, R. and H. Fazeli Nashli (eds.) *The Neolithisation of Iran, The Formation of New Societies*, Oxbow Books, Oxford, pp. 13-18. (査読有)
- ⑦ Tsuneki, A. (2013) Proto-Neolithic caves and neolithisation in the southern Zagros, in Matthews, R. and H. Fazeli Nashli (eds.) *The Neolithisation of Iran, The Formation of New Societies*. Oxbow Books, Oxford, pp. 84-96. (査読有)
- ⑧ Tsuneki, A. (2013) The archaeology of death in the Late Neolithic: a view from Tell el-Kerkh, in Nieuwenhuys, O. P., R. Bernbeck, P.P.M.G. Akkermans, and J. Rogasch (eds.) *Interpreting the Late Neolithic of Upper Mesopotamia*. Brepols Publishers, Turnhout, pp. 203-212. (査読有)
- ⑨ Tsuneki, A. (2013) Another image of complexity: the case of Tell el-Kerkh, in Nishiaki, Y., Kashima, K., and Verhoeven, M. (eds.) *Neolithic Archaeology in the Khabor Valley, Upper Mesopotamia and Beyond*. Studies in Early Near Eastern Production, Subsistence, and Environment 15, Berlin, ex oriente, pp. 188-204. (査読有)
- ⑩ Numoto, H., Shibata, D. and Yamada, S. (2013) Excavations at Tell Taban: Continuity and Transition in Local Traditions at Tabatum/Tabetu during the second Millennium BC, in D. Bonatz and L. Martin eds., *100 Jahre archäologische Feldforschungen in Nordost-Syrien – eine Bilanz*, Wiesbaden, pp. 167-179. (査読有)
- ⑪ Tsuneki, A. (2012) The Arsanjan prehistoric project and the significance of southern Iran in Human history, in Fahimi, H. and Alizadeh, K. (eds.) *Nāmvarnāmeḥ, Papers in Honour of Massoud Azarnoush*. IranNagar Publication, Tehran, pp. 19-30. (査読有)
- ⑫ Yamada, S., (2012) “The City of Tabatum and Its Surroundings: The Organization of Power in the Post-Hammurabi Period,” in G. Wilhelm (ed.), *Organisation, Representation and Symbols of Power in the Ancient Near East*, Winona Lake, pp. 589-600. (査読有)
- [学会発表] (計 30 件)
- ① 常木晃、山田重郎、久田健一郎、ほか『西アジア文明学の創出 2：古代西アジア文明が現代に伝えること』Research Center for West Asian Civilization (ed.) *Facilitating the Study of West Asian Civilization 2: Ancient West Asian Civilization and the Modern World*. 文部科学省科学研究費補助金新学術領域研究「現代文明の基層としての古代西アジア文明－文明の衝突論を克服するために－」2017年3月3-4日、サンシャインシティ文化会館集会室、東京都豊島区
- ② Tsuneki, A. Introduction to the symposium on the future of the Syrian cultural heritage. T15G Future of the Syrian Cultural Heritage under the Crisis: Considering the framework for the Post-war Rehabilitation. *The Eighth World Archaeological Congress*, P. 384, Kyoto, Japan, Doshisha University (2016年8月28日-9月2日).
- ③ Tsuneki, A. Tell el-Kerkh (Idlib), in *International Syrian Congress on Archaeology and Cultural Heritage, Program and Abstracts*, pp.32-33. ISCACH Organizing Committee, Gefinor Rotana Hotel, Beirut, Lebanon (Dec. 3-6, 2015, 発表は12月3日, 議長、Organizing committee)
- ④ Tsuneki, A. The role of cultural heritage and its current condition in Iraq and Syria, in *Tsukuba Global Science Week 2015* (Sep. 28 – Sep. 30, 2015) *Culture and Security: Exploring Future Values through Japanese*

- Experience* pp.16. Tsukuba International Congress Center, Tsukuba, Ibaraki (発表は9月28日)
- ⑤ 常木 晃、山田重郎、久田健一郎、他 (2014), 西アジア文明研究センター編 『西アジア文明学の創出1：今なぜ西アジア文明なのか?』 Research Center for West Asian Civilization (ed.) *Facilitating the Study of West Asian Civilization: What Does Ancient West Asia Tell Us?* 文部科学省科学研究費補助金新学術領域研究「現代文明の基層としての古代西アジア文明—文明の衝突論を克服するために—」サンシャインシティ文化会館集会室、東京都豊島区
- ⑥ Tsuneki, A. “The site of Tappeh Sang-e Chakhmaq”, “Pottery and other objects”, in Tsuneki, A. (ed.) *The First Farming Village in Northeast Iran and Turan: Tappeh Sang-e Chakhmaq and Beyond*, pp.5-8, pp.13-18. Research Center for West Asian Civilization, University of Tsukuba, Tsukuba, Ibaraki, 51p. (2014年2月10-11日)
- ⑦ Tsuneki, A. (2014) “Tappeh Sang-i Chaxmaq and the Neolithization of Northeastern Iran”, *9th International Congress on the Archaeology of the Ancient Near East, Abstracts*, pp.125, University of Basel, June 9-13, 2014, Basel, Switzerland (査読有)
- ⑧ Tsuneki, A. and Hourshid, S. (2012) Archaeological excavations at Seyed Khatoon cave (A5-3), Arsanjan township, Fars province, *Exhibition of the Newly Discovered Archaeological Finds, 2008-2011*. Tehran, National Museum, Research Center of Iranian Cultural Heritage, Handicrafts and Tourism Organization, Iranian Center for Archaeological Research, pp. 2-4, 35. Tehran, Iran (査読無)
- ⑨ Tsuneki, A. (2012) Tappeh Sang-i Chaxmaq and the Origin of the Jeitun Culture, *Workshop on the Archaeology of Neolithic and Early Chalcolithic / Aeneolithic Central Iran and Turan, Abstract*. Free University of Berlin, Dahlam, Berlin, Germany, pp. 39-48. (査読無)

[図書] (計12件)

- ① Tsuneki, A. Chapter 1. The significance of research on the emergence of pottery in West Asia, Chapter 11. The emergence of pottery in northeast Iran: The case study of Tappeh Sang-e Chakhmaq, in Tsuneki, A., Nieuwenhuys, O. and Campbell, S. (eds.) *The Emergence of Pottery in*

West Asia: 1-8, 119-132. Oxbow Books, Oxford & Philadelphia, ISBN 978-1-78570-526-7, 2017 (総ページ数192)

- ② Kanjou, Y. and Tsuneki, A. (eds.) *Tarikh Suria fi Mia Muwaqa Ashariya*, Salhani Printing Establishment, Damascus. : ISBN 973-9933-9236-8-6 2017 (総ページ数445)
- ③ Tsuneki, A., Yamada, Sh. and Hisada, K. (eds.) *Ancient West Asian Civilization: Geoenvironment and Society in the Pre-Islamic Middle East*, Springer, New York. ISBN 978-981-10-0553-4, 2016 (総ページ数230)
- ④ Kanjou, Y. and Tsuneki, A. (eds.) *A History of Syria in One Hundred sites*. Archaeopress, Oxford. ISBN 978-1-78491-381-6, 2016 (総ページ数451)
- ⑤ Yamada, S. and Ziegler, N., eds. (2013) *Revue d'assyriologie et d'archéologie orientale 105 (2011, Special Issue): Mari, Tabatum and Emar: Geographical, Political and Cultural Aspects along the Middle Euphrates and Lower Habur*, Paris : (総ページ数232) .

[その他]

ホームページ等

<http://rcwasia.hass.tsukuba.ac.jp/kaken/>
<http://rcwasia.hass.tsukuba.ac.jp/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

常木 晃 (TSUNEKI, Akira)
 筑波大学・人文社会系・教授
 研究者番号：70192648

(2) 研究分担者

山田 重郎 (YAMADA, Shigeo)
 筑波大学・人文社会系・教授
 研究者番号：30323223

久田 健一郎 (HISADA, Ken-ichiro)
 筑波大学・生命環境系・教授
 研究者番号：50156585